

田中親美透写古筆切「名葉集」の研究(1)

小島孝之

はじめに

近代における古筆及び古画、すなわち古美術の模写による紹介とその研究の道を開いた田中親美については、これまで折に触れて言及してきたところであるが、私がこうした分野に手を染めたそもそもの発端も田中親美翁について知ったことが始まりであった。しかし、翁が百一歳の長寿を全うしたのは昭和五十年のことであり、当時、私はまだ博士課程一年目の学生に過ぎず、古筆切についての知識も浅薄なものに過ぎなかった。残念なことに田中親美翁の直接の薫陶を受けることができなかったのである。だが、ありがたいことに田中親美邸で毎月開かれていた古筆の研究会は、ご令息の重氏

のもとで続けられた。私が参加を許されたところ研究会の中心になっていたのは古筆研究の大家である春名好重氏と平安文学研究者の萩谷朴氏であった。一誠堂の二代目社長酒井宇吉氏もほぼ毎回出席されていた。美術史家の江上綏氏、国語学の安田尚道氏、書道家の細貝宗弘氏もほぼ皆勤であった。私の古筆分野の研究を深められたのは右記の諸先輩の指導のおかげである。就中、会主田中重氏の恩恵は計り知れない。親美翁の模写作成の手法、料紙のこと、版木作成のこと等々、実にさまざまな事柄について、容易に知り得ない実態についても、実際に翁の傍らでその仕事を手伝うなど、知悉していた重氏から詳細にお教えをいただいた。

その田中親美翁が折に触れて透写しておいた古筆切を、「古筆名葉集」に倣う形式で冊子に貼り、「名葉集」上・下と

題して二帖にまとめたものが重氏の手元に大切に保存されていた。以前にも部分的に撮影させていただき、研究に使用することができたのであったが、二年程前、全部を写真撮影してその研究を発表してもよいとお許しを頂いた。そこで数回にわたって撮影し、とりあえず内容を一覽にして研究会において報告したのであるが、詳細は後日あらためてということで持ち越していたところ、新型コロナウイルスの流行が始まり、東京は緊急事態宣言がくり返し発令されることになってしまった。会主の重氏はコロナ禍の中で米寿を迎えられたが、お宅が人の集まる渋谷ということでは、集まってお祝いをすることも叶わず、研究会も休会が続いた。そうした中、つい先日重氏が天寿を全うされたとの報に接し、痛恨の極み、言うべき言葉も見つからない。ご存命のうちに詳しい内容の研究結果を報告しておきたかったのだが、すべては後の祭り、私のいつもの怠惰が招いた失態である。

遅きに失したが、ここに発表のための場を借りて、連載中の入札目録の内容紹介を一旦休み、親美翁の透写した古筆切の内容を紹介し、詳しい調査結果の報告をさせて頂くこととしたい。

貼付された古筆切は三百四十六枚。このうち一点は下絵の

写しのみで文面の写しはないのでこれを除き、重複しているものが一点あるのでこれも数から減ずると、古筆切としては三百四十四種が貼られていることになる。このうちの半数近くが未紹介の newly 資料である。すでに現存が知られているものの多くは国宝手鑑『翰墨城』や『藻塩草』中のものであるが、未紹介のもののが大半が所蔵元の不明なものであり、現存するか否かも分からないものばかりである。その資料的価値は非常に大きなものがある。しかしながら、百六十点を超える写真をここに一挙に掲載するのは難しいので、数回に分けて分載することにしたと思う。

『名葉集 上』の内容 (1)

『名葉集』は、版本の『古筆名葉集』を筆者名ごとに順に切り取って、見出し代わりに冒頭に貼りつけてある。また、ほとんどの断簡の冒頭には、親美翁の筆で非常に小さな文字で伝称筆者名や切名が記されている。断簡の右下には同様に親美翁の手で透写元が「翰墨城」「翰墨」「翰」などと記されており、「藻塩草」も多い(記入を省略している場合もある)。

「益田氏」とあるのは益田孝(鈍翁)の所有であることを表

すのであろうことは容易に推察できる。「田中光顕」とあればこれも所蔵者はわかるが、中に非常に多いのが「谷」としているもので、これはどれも現存を確認出来ない未紹介の断簡であるため、所蔵者の「谷」なる人物が誰を指すのか、未詳とせざるを得ない。

断簡の左傍らには主に料紙の特徴が、「金銀砂子」とか、さまざまに書き込まれているのだが、文字が小さすぎて判別できない場合も少なくない。

したがって、ここでは貼付された順に通し番号を振り、見出しは貼付された筆者名を記し、これも親美翁の手で記された切名（不記入の場合は、私の判断で）を掲げることとする。未紹介の断簡に限って写真と翻刻を掲出する。

1 聖武天皇 大聖武

古筆手鑑の巻頭には「聖武天皇」筆の経切を貼ることになっている。中でも所謂「大聖武」が最も重視される。内容は『賢愚経』である、というところまでは常識である。現行「大正大蔵経」所収の經典とは巻の順序や本文に若干の違いがあるが、便宜、大正大蔵の篇次で記すと、「富那奇縁品第二十九」の一部である（以下同様に大正大蔵の頁数下三桁、

段（上中下段を a b c とする）、何行目などを示す）。

この断簡の原本の所在は知られている。五島美術館所蔵の手鑑『染紙帖』に貼られており、『五島美術館の名品』【絵画と書】にカラー写真が収められてもいる。『染紙帖』には五行の本文が存在するのに、透写は二行のみで、何故か途中でやめてしまったらしい。どういう事情があったのかは不明で、確かめようはない。

2 聖武天皇 経切（2）

伝聖武天皇筆の経切には他に「大聖武」同様の「茶毘紙」と呼ばれる料紙に書写した「中聖武」「小聖武」と称される經典數種、その他の經典數種があり、私に仮に分類してツレと思われる断簡に番号を振っているが、私の個人的分類なので汎用性はないことをお断りした上で、以下の紹介には私の分類番号を記すことをお許しいただきたい。

本断簡は「聖武天皇」の「経切（2）」に相当するもので、内容は『華嚴経』である。いわゆる「八十華嚴」と称される八十巻本で、巻九の巻末の三行である（大蔵 08c 14-17）。弥彦神社蔵手鑑『見ぬ世の友』に貼られているもの、『思文閣古書資料目録一五号』、同一四九号に掲載された古筆手

3

聖武天皇 經切(6)

大方広佛華嚴經卷第九

(翻刻) 莊嚴而覆其上二十佛刹微塵數世界圍繞
純一清淨佛号普照法界無礙光

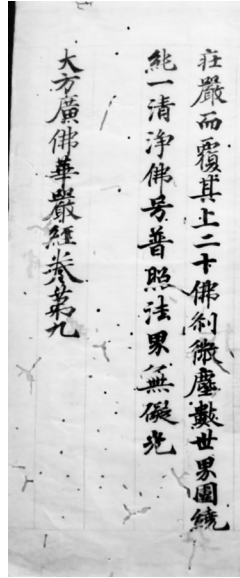


図1

鑑に貼られているもの、『潮音堂書蹟典籍目錄二三号』に載せられたものなどがツレに相当すると思われる。寸法は、縦二六・八cm、横一一・八cm。界二三・〇cm、罫二・三cm。透写の四隅に紙端を示す線があるので、縦横の寸法は測定でき、ほぼ原本のままであると考えられる。(図1)

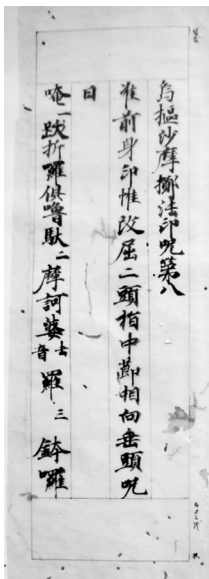


図2

4 聖武天皇 經切(19)

私に「伝聖武天皇筆經切(19)」とするものである。内容は『陀羅尼集經』の卷九(862a19-22)で、ツレの断簡として、本断簡の十行ほど後に続く部分が五島美術館蔵『染紙帖』に貼られている。本断簡の寸法は二五・六×七・五cm。界一九・九、罫二・〇cmである。原本所蔵者として略号「林」とあり、料紙を「白ダビ紙」としてある。『染紙帖』の断簡が唯一の存在だったが、本断簡によつて初めてツレの存在を知ることができた。(図2)

私に「伝聖武天皇筆經切(6)」とするもの。内容は『十誦律』で、原本はMOA美術館蔵国宝手鑑『翰墨城』に所収。ツレは出光美術館蔵国宝手鑑『見ぬ世の友』に所収で、この二点以外は管見に入らない。

(翻刻)

烏板沙摩擲法印呪第八

准前身印惟改屈二頭指中節相向垂頭呪

曰

唵一跋折囉俱嚕駄二摩訶婆音法羅三鉢囉

5 聖武天皇 阿弥陀院切

本断簡は国宝手鑑『藻塩草』に貼付の「阿弥陀院切」の透写。内容は『涅槃経疏』の「序品」である。

6 聖武天皇 阿弥陀院切

右の『藻塩草』所収断簡のツレである。筆跡の特徴から、内容の經典の一致からも認められよう。『涅槃経疏』の巻一(044 b 24—26)の二行である。寸法は、二七・八×五・一 cm。界二三・二 cm。罫の幅は約二・五 cm 程度。二行なので正確な幅は測定できない。透写元の所蔵者と見られる傍記に「谷」と小さく記されている。(図3)

(翻刻)

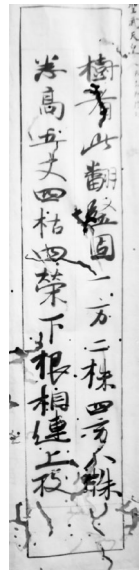


図3

樹者此翻堅固一方二株四方八株
悉高五丈四枯四榮下根相連上枝

7 聖武天皇 経切(12)

私に「伝聖武天皇筆経切(12)」とするもの。内容は『大宝積経』卷二二「被甲莊嚴会」七—二(123 b 27—c 07)の五行である。寸法は二七・七×一一・九 cm。界二三・三、罫二・五 cm。

この断簡のツレはかなり多く、今現在の時点で十八点を確認している。そのほとんどが古書店の目録に掲載されているもので、その内十五点が卷二二の「被甲莊嚴会」の一部である。中には「中聖武」「小聖武」と銘打たれているものも散見する。「大聖武」以外の伝聖武天皇筆経切としては最も多く存在する経切であり、伝聖武天皇筆の経切を代表するもの

がれたもののようなので、どちらとも断定しかねる。そして本透写断簡には、「銀界、上下金銀砂子」とあり、料紙からはa、頁からはbが相応しい。これ以上の分類作業は現段階では困難であると思われる。(図5)

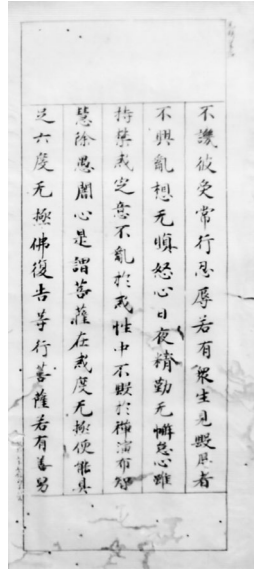


図5

(翻刻)

不讓彼受常行忍辱若有衆生見毀辱者
不興亂想无嗔怒心日夜精勤无懈怠心雖
持禁戒定意不乱於戒性中不毀於禪演布智
慧除愚闇心是謂菩薩在戒度无極便能具
足六度无極仏復告等行菩薩若有善男

9 光明皇后 經切(14c)

『無量義經』德行品(387c 02|05)の三行である。寸法は二五・一×五・四cm、界一九・三、罫一・八cm。

私の分類で「伝光明皇后筆經切」の(14)である。ツレらしきものはあるが、料紙の同一性の判定が出来ないので、不明とするしかない。經典については、料紙の一致、装飾の類似性、罫の一致、筆跡の類似などが判定の材料となるが、それらがすべて判明するのは稀で、それ以外には判断の決め手がないのである。經典についてはいずれにしても決め手に欠ける場合が多く不確実になるのが避けられない。(図6)



図6

(翻刻)

則能通達百千億義無量數劫不能演說所
受持法所以者何以其是法戒無量故善男
子是經譬如從一種子生百千万百千万中

10 光明皇后 出雲切

本断簡は国宝手鑑『藻塩草』に貼付のものの透写である。

『藻塩草』では「出雲切」とされているが、今のところツレの断簡を見出してはいない。経典の内容は『大宝積経』である。

11 光明皇后 経切(4h)

『大般若経』卷二四三「初分難信解品」(229 a 11—15)の四行である。寸法は、二六・〇×七・四cm、界一九・三、罫一・八cm。

伝光明皇后筆の『大般若経』の断簡は私の分類で(4)としているが、その内訳はさらに十三種と十六種に細分でき、本断簡と同じ「初分難信解品」に属するツレとおぼしい断簡には、前出『光明皇后始手鑑』に貼付のもの、東京都立中央図書館蔵手鑑『古名筆帖』一に貼付のものなどがあるが、筆跡の類似以外の決め手がないので不確実である。(図7)。

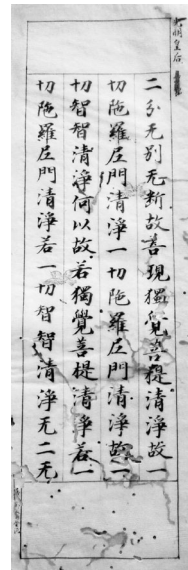


図7

(翻刻)

二分无别无断故善現獨覺菩提清淨故一切陀羅尼門清淨一切陀羅尼門清淨故一切智智清淨何以故若獨覺菩提清淨若一切智智清淨若一切智智清淨无二无

12 嵯峨天皇 経切(6)

『無量寿経』卷下(276 a 19—27)八行の断簡である。寸法は二五・二×一五・一cm、界一九・一cm、罫二・〇cm。右上紙端には「嵯峨帝 □加弘法大師 飯室類切」とあり、左下紙端には「□墨□□□□□□に [素紙] とあるが、□部分の文字は解読できない。本文中に薄墨によるカナの訓と訓点があり、これを弘法大師の筆としていると思われる。伝嵯峨天皇筆の代表的なものが「飯室切」とされ、白点と訓の書き入れ

を弘法大師筆と言ひ慣わされており、それに準じていると思われる。所藏者の略号「谷」の記述がある。

「飯室切」以外の「伝嵯峨天皇筆経切」の私の分類で(6)としているものである。明白なツレについては不明であるが、『無量寿経』を「嵯峨天皇」筆と極めているものは、他に昭和十一年五月二十五日入札の『旧日向飫肥藩主伊東子爵家所藏品入札目録』所載の古筆手鑑に見える。(図8)

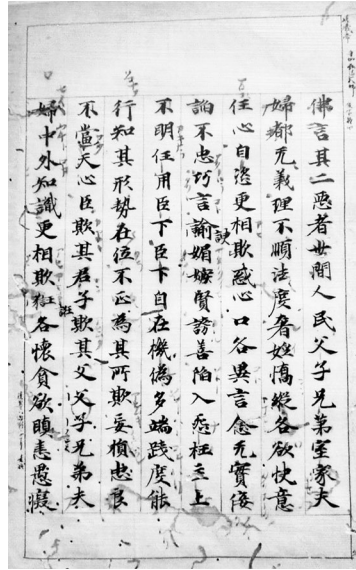


図8

(翻刻)

伝言其二惡者世間人民父子兄弟室家夫
 婦都无義理不順法度奢姁嬌縱各欲快意
 任心自恣更相欺惑心口各異言念无実佞
 諂不忠巧言諭(愚)媚嬌賢誇善陷入怨枉主上
 不明任用臣下臣下自在機偽多端踐度能
 行知其形勢在位不正為其所欺妄損忠良
 不当天心臣欺其君子欺其父父子兄弟未
 婦中外知識更相欺詐各懷貪欲瞋恚愚癡

13 嵯峨天皇 叡山切

本断簡は国宝手鑑『藻塩草』に貼付のものの透写である。『藻塩草』では「叡山切」とされているが、これも今のところツレの断簡が見出されない。經典の内容は『五仏頂三昧陀羅尼経』である。この經典の古筆切自体が珍しい。

14 白川院 撰津切

本断簡の原本も『藻塩草』に貼付のもの。内容は『大乘起信論』である。なお、『藻塩草』では「撰津切」とするが、国宝手鑑『見ぬ世の友』はこのツレを「丹波切」としており、

その方が一般的な呼称かと思われる。本「名葉集」が見出しとして切り貼りしている『増補古筆名葉集』でも「丹波切」と掲げている。

15 後白川院 経切(7a)

「伝後白河院筆経切」の名物としては、「法勝寺切」の『華嚴経』と、「六波羅切」の『無量義経』とが有名であるが、本断簡はそれ以外の『法華経』の断簡(049 b 18—21)である。その『法華経』断簡にも数種あり、本断簡は私に(7a)と分類するもの。ツレと思われる断簡には、石川県立美術館所蔵手鑑中のもののほか一点がある。内容も「法師品」の近接箇所であり、寸法は、二五・一×五・六cm、界一八・八cm。罫一・八cmで、大きさも石川県立美術館所蔵のものとはほぼ一致する。欄外に「金銀大中小切箔砂子ノゲ金罫切金墨字…」とある(末尾の方は判読出来ない)。石川県立美術館所蔵のものも金罫墨字で本文と天地には金銀の箔が霞に撒かれているので、料紙の装飾も一致すると思われる。(図9)

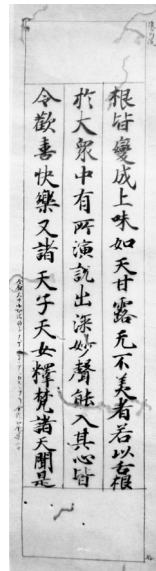


図9

(翻刻)

根皆變成上味如天甘露无不美者若以舌根

於大衆中有所演說出深妙声能入其心皆

令歡喜快樂又諸天子天女釈梵諸天聞是

16 後鳥羽院 後鳥羽院宸記切

後鳥羽院の宸筆とされる『後鳥羽院宸記』の断簡である。古くは佐佐木信綱が『竹柏園藏書志』に所蔵の断簡を紹介し、『心の花』に考察を発表したことにより、その存在が知られてきた。『古筆凌寒帖』にも同じ断簡が原寸大で紹介されたが、『後鳥羽院宸記』の断簡は主要な手鑑にも見られず、研究はなかなか進まなかった。平林盛徳氏の「後鳥羽院宸記切と宸記逸文」(『国書漢籍論集』、平成3年)が発表されて、徐々に逸文が見いだされつつあり、現時点で十点余りの断簡の存在が知られるに至っている。本断簡はそれらに加えられる

新出断簡である。寸法は二七・五×一二・〇cmである。なお、「荒磯切」と呼んでいる向きがあるが、何に拠る命名なのか知らない。(図10)

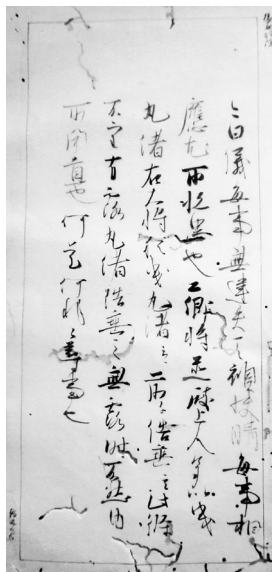


図10

(翻刻)

今日儀毎事無遺失天頗快晴毎事相

応尤所悦思也公卿將承殿上人□亦曳

凡渚右大将猶曳凡渚々々前に借垂云々此條

不定有露凡渚借垂之無露時不然因

所聞直也何是非□□事也

17 後鳥羽院 田原切

『伊勢物語』第二十一段の断簡である。本断簡の原本は平

成十七年十一月に出光美術館で開催された「平安の仮名鎌倉の仮名」展に出品されたもので、『古筆切研究 一』に高城弘一氏蔵として掲載されてもいる。このツレは、『古筆学大成』には伝藤原為家筆「伊勢物語切(一)」として二点掲載されているほか、久曾神昇氏の『物語古筆断簡集成』には「藤原為家」とする極札とともに一葉が掲載されている。

18 後嵯峨院 鎌倉切

『古今和歌集』卷十三(639—643番)の断簡十三行である。

寸法は一六・一×一五・九cm。「鎌倉切」とされるが、主な古筆手鑑等には見られないようである。既知の断簡は田中登氏の『平成新修古筆資料集 一』(同氏『古筆切の国文学的研究』既出)と『古筆の楽しみ』(平成二十五年の『阪急古書のまち古書目録』に既出)の二葉が知られるのみであった。この二葉はともに卷十三の、652—653番、660—663番に相当する。他には卷十二(555—556番)の一葉が平成十三年八月の『第五十一回東西老舗大古書市出品目録抄』に載っている。(図11)

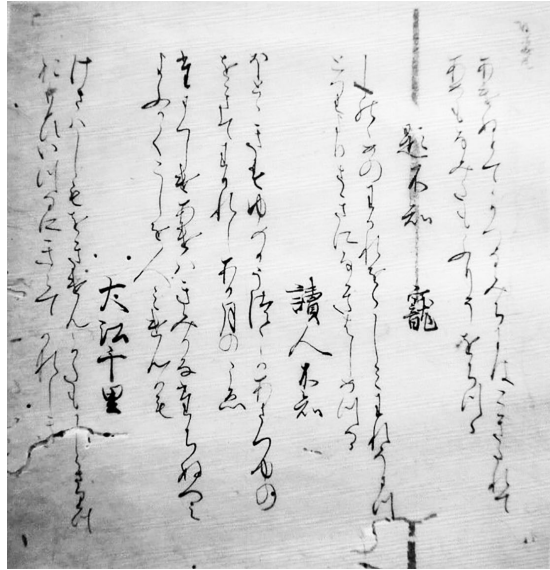


図11

(翻刻)

あけぬとてかへるみちにはこきたれて
あめもなみたもふりそをちつ、

題不知 龍

しの、めのわかれを、しみわれそまつ

とりよりさきになきはしめつる

読人不知

ほと、きすゆめかうつ、かあさつゆの
をきてわかれしあか月のこゑ

たまくしけあけはきみかなたちぬへみ

よふかくこしを人みけんかも

大江千里

けさはしもをきけんかたもしらさりつ

おもひいつるそきえてかなしき

19 後嵯峨院 御手判切

本断簡の原本は『藻塩草』に貼付のもの。後嵯峨院の宸翰と極められるが、古筆手鑑『あけほの』(上)に貼られている断簡には署名があり、空竟の置文であると知られている。

20 後深草院 書状切

見出しに「後深草院」とあるが、根拠は不明である。右下欄外には「益田」とあり、原本は益田鈍翁の所蔵だったかと推測できるが、その後の所在については分からない。寸法は

二七・八×一〇・五cm。(図12)

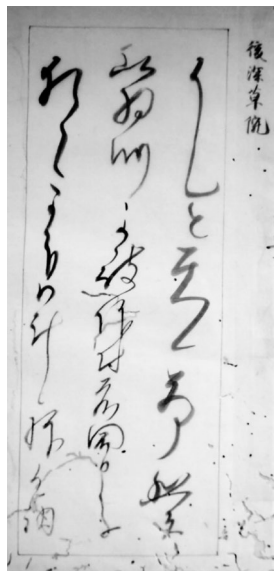


図12

(翻刻省略)

21 後深草院 常盤切

これも書状の断簡であるが、見出しに「後深草院 ときわ切」とあり、「裏に経文ヲ印刷ス」と傍記されている。『昭和 新撰古筆名葉集』は「後深草院」の項に「常盤切」を掲げ、「杉原鳥ノ子版経裏ナドアリ」と記している。「杉原」と「鳥ノ子」とは相互に矛盾するので、「杉原紙」のものも「鳥ノ子」のものも各種あると解するのである。裏面に経文の版刷りがあれば「常盤切」とするということであろう。必ずしも同一書状の断簡ではないということか。本断簡の寸法は、二七・二×二二・六cmである。透写元として「翰林」とある。

(図13)

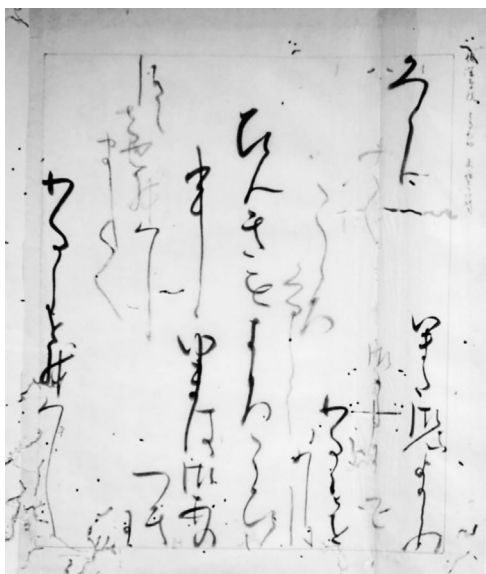


図13

(翻刻省略)

22 亀山院 歌集切(17)

未詳歌集の断簡。料紙の後半に余白があるので、歌集の巻末かもしれない。二九・三×一六・五cm。伝亀山院筆の歌集

切には、装飾紙に歌を三行の散し書きにした「金剛院切」とその類切が数種ある。他にも出典未詳の歌集切がかなり多く存在する。仮番号で本断簡は「歌集切(17)」であるが、ツレは見当たらない。(図14)

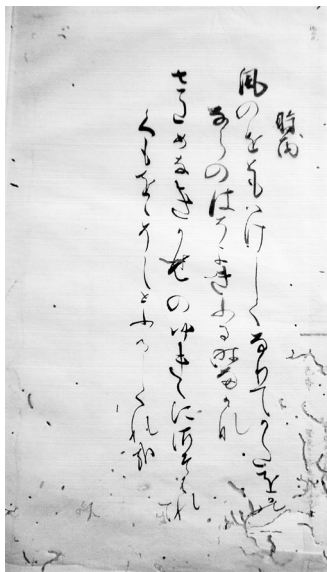


図14

(翻刻)

時雨

風のをともはけしくなりてかたをかの
 ならのはそよきふる時雨かな
 さためなきかせのゆき、にさそはれて
 くもを、そしとふるしくれ哉

(余白三分分)

23 後宇多院 松木切

見出しには「後宇多院 松木切」とある。料紙の寸法は、三二・五×八・二cmで、料紙の大きさ、書風などは確かに「松木切」らしく見える。「松木切」は、「兼行集」「藤大納言典侍為子集」「親子集」「伏見天皇集」などの存在が知られており、京極派の人々の歌集かと考えられている。誰の歌集か未詳の断簡も多く、未だ謎の多い古筆切である。本断簡は解読も難しく、歌も未詳の歌ばかりで、今は後考を俟つ以外に先に進むことが出来ない。透写元を「翰林」としてある。

(図15)

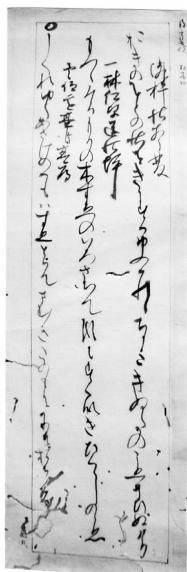


図15

(翻刻)

□機の打□夢

おきのをとの秋をきかするゆふくれ□ちかききぬたのこ
 糸□そひぬけり

一林仁□道の□

も□つ、ける木すゑのいろさ□ちて風もすくなきひくらし
 のこゑ

雲□遠寒□寒馬

○しくれゆくあさけのくもはすゑと□てさむきたのものにか
 りそおちける

24 後宇多院 続後撰集切

見出しには「後宇多院」とあるが、実は「伝後鳥羽院筆 続後撰集切」である。実際には「阿仏」「後嵯峨院」という極めを持つものもあり、「後宇多院」とするものはかなり多くあるのだが、『古筆学大成』がこれを「伝後鳥羽院筆」に分類しているのので、それに従うことにする。

『続後撰集』巻二十(134—136)であるが、特筆すべきは下絵が書かれていることである。ツレの断簡を見ると、亀甲文様の雲母刷り、七宝文様の唐紙、布目打紙などさまざまな料

紙が用いられた節がある。ただし、下絵のある紙を使いまわした可能性も捨てきれない。一三三・三×一五・二cm。(図16)



図16

(翻刻)

君かよの春にちきれる花なれば

またゆくすゑのかきりなきかな

永長元年三月おなしく花契千年

といふ事を序たてまつりて

前中納言匡房

いはねとも色にそしるきさくらはな

君かちとせの春のはしめは

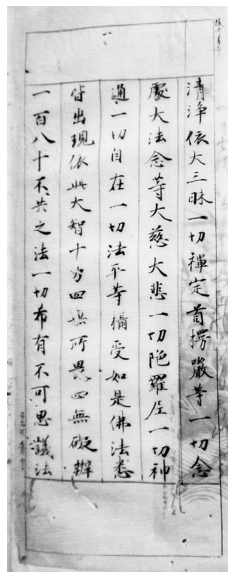


図17

(翻刻)

清浄依大三昧一切禪定首楞嚴等一切念

天曆七年十月きさいの宮の御方に菊う

25 後宇多院 経切

『金光明最勝王経』卷二(409c 13—18)の断筒である。

伝後宇多院筆の経切は少なく、現在四葉を見出すのみであるが、すべて『金光明最勝王経』卷二の断筒であり、ツレと見做してよいと思われる。寸法は二五・五×九・八cm、界一・九・三、罫一・九cmで、この点もほぼ一致する。なお、一枚前の「続後撰集切」の透写と料紙の一部を重ねて貼り付けてあるため、前の断筒の下絵が下に見える。(図17)

處大法念等大慈大悲一切陀羅尼一切神
 通一切自在一切法平等撰受如是仏法悉
 皆出現依此大智十力四無所畏四無礙辨
 一百八十不共之法一切希有不可思議法

26 伏見院 堀川切

見出し通りの「伏見院筆堀川切」である。内容は「古今集」卷一(60—61)の断筒で、すでに久曾神昇氏の『古今集成立論』の図112、及び『古筆切影印解説I 古今集』の「鎌倉時代118」に掲載されている断筒である。

27 伏見院 堀川切

本断筒も「伏見院筆堀川切」であり、原本は国宝手鑑『翰墨城』所収の断筒である。

28 伏見院 歌合切

本断筒の内容は『俊成三十六人歌合』かと思われる。すでに、日比野浩信・鶴田大著『歌びと達の競演』に11番として掲載されており、久曾神昇氏の旧蔵であったことがわかる。この断筒についても右書に原本による詳しい説明があるので

省略する。

29 後二条院 新後撰集切

伝後二条院筆の『新後撰集』巻四(347―348)の断簡である。巻末に相当する箇所なので、後半に数行分の余白がある。ツレの断簡によれば、一面十行書きらしいので、四行分になるうか。伝後二条院筆の『新後撰集切』は多くはないが、数点のツレが明らかにされており、『古筆切影解説Ⅴ』の五などに掲げられている。本断簡と同じ巻四の断簡が多い。二三・〇×一五・〇cm。透写元についての書入れはない。(図

18)

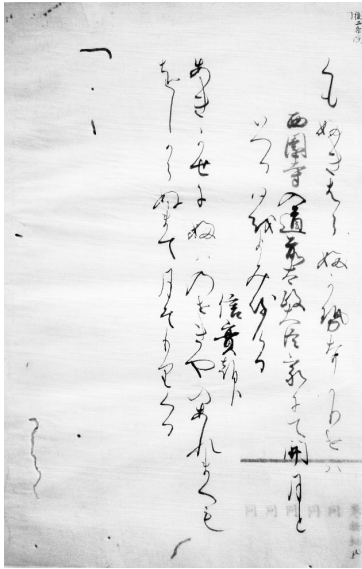


図18

(翻刻)

くもふきはらふかせなかりせは

西園寺入道前太政大臣家にて関月と

いへる心をよみ侍ける

信実朝臣

あきかせにふはのせきやのあれまくも

をしからぬまで月そもりくる

(余白四行分)

30 後醍醐天皇 吉野切

一首の和歌を一面に散し書きにしたもので、一見色紙のよに見えるところから、「吉野色紙」と極めていれるものもあるが、冊子の一葉を切り取ったものである。原型の歌集が何集であったかが不明で、「堀川百首」との濃厚な関係を描した伊井春樹氏の説が早くに提唱されているが、『古筆学大成』の解説において、小松茂美氏は散逸歌集の『恋部集』の断簡ではないかとの説を主張している。確かに現存する歌はすべて恋の部に属する歌らしく思えるので、小松説に惹かれるが、肝心の『恋部集』の形態を推測できる資料が見つかる

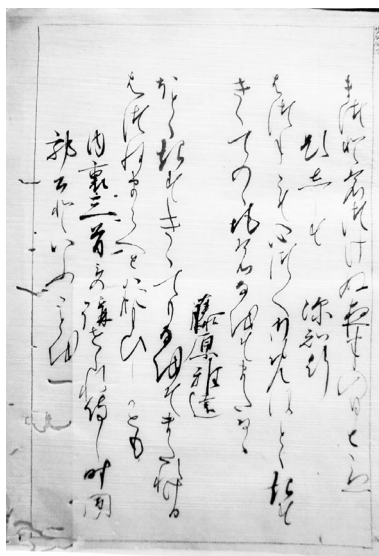
ていないので、積極的な肯定も出来ない。本断簡は『翰墨城』所収の断簡の透写である。

31 後醍醐天皇 吉野切

見出しに「後醍醐帝 吉野切」とあり、透写の出典を「藻塩草」とし、「白二」と小書きしている。この「白二」は料紙の特徴を指すかと思われるが、よくわからない。

32 後醍醐天皇 新浜木綿集切

中世の散逸歌集である『新浜木綿集』の断簡九行。『浜木綿集』に倣って編まれた私撰集であるが、どちらも散逸して、完本が存在しない。ゆえに古筆切の意義はたいへん重要であると言える。料紙の大きさ筆跡の特徴などから、本断簡は『新浜木綿集』の断簡と認められる。歌の内容が「ほととぎす」であることから判断して、巻二の「夏部」の一葉であろう。「夏部」は一点しか知られていなかった点でも重要だと思われる。一三・三・一五・二cmであり、下記の33との類似性が問題になると思われるが、当の33の解説において詳述する。所蔵者名とおぼしき「谷」の小書きがある。(図19)



(翻刻)

まつともつけぬ夜半のひとこゑ

題しらす 源知行

はつねこそ心つくさめほととぎす

き、ての、ちもなをそまたる、

藤原雅遠

ほととぎすき、てもなをそまたれける

はつねまてとはおもひしかとも

内裏三首歌講せられ侍し時間

郭公といふことを

図19

33 後醍醐天皇 歌集切(5)

前述した「新浜木綿集切」に酷似した断簡である。当断簡の大きさは、二二・六×一三・二cmで、筆跡も極めて酷似している。他に材料がない状態で写真だけを比べたら、おそらく「新浜木綿集切」だと判断するだろうと思われる。しかし、原寸大の透写があつて、重ねて見ることが可能なので、そうして重ねて見ると明らかに字高が違うのである。ツレと断ずるには躊躇せざるを得ない。ひとまず、未詳歌集切としておきたい。(図20)

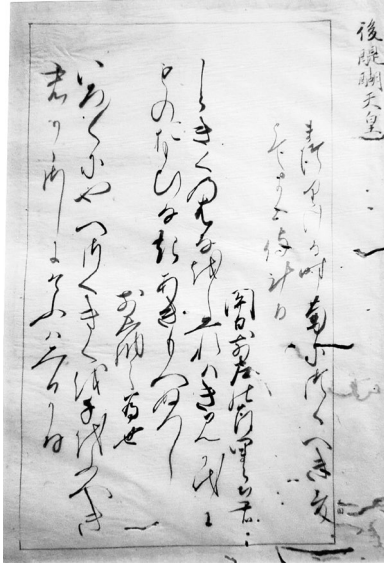


図20

(翻刻)

まつりける時菊につくへき哥
とてよみ侍ける

関白前左のおほいまうち君

しらきくのはなをしみれはきみか代に
ものおもひなきあきもへぬへし

前大納言爲世

いろく／＼にやへさくきくを千代ふへき

君かゝさしにけふはみるかな

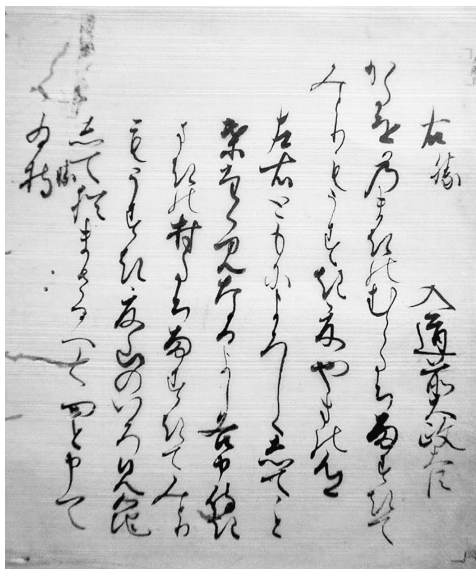


図21

34 光厳院 歌合切(2)

伝光厳院筆の歌合切として『八木書店古書目録』51号に「五種歌合」、『書陵部蔵古筆手鑑』に「未詳歌合」の断簡があり、石澤一志氏の紹介した「三十六人歌合」があるが、本断簡はそれらのいずれとも異なる『仙洞五十番歌合』（34番）の断簡である。ツレは管見に入らない。一五・二×一四・一cmであり、欄外小書きに「谷」とある。(図21)

(翻刻)

右勝 入道前太政大臣

かたをかのみまきのむらたち雨すきて
みとりもうすき夏やまの道

左右ともよろしくしてこと

葉たくみなるよし各申侍き

まきの村たち雨すきてみとり

もうすき夏山のいろ見心地

して猶まさるへくやと申て

為持^印

35 崇光院 新古今集切

『新古今集』卷十二(1102—1105)の断簡である。見出しには「崇光院」とあるが、これまで伝崇光院筆の古筆切の中に「新古今集」の断簡は見られなかった。したがって、他の筆者名のものとの異伝である可能性は少なくないと思われるが、今のところ該当しそうなものには思い当たらない。

一六・九×一七・三cm。当断簡の欄外にも「谷」の小書きがある。(図22)

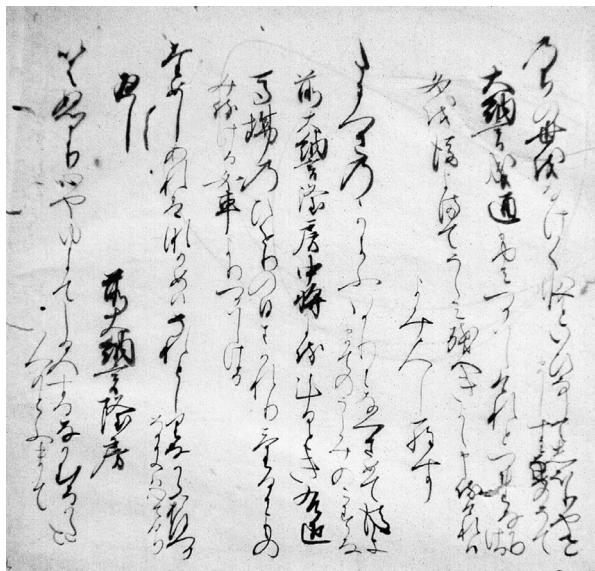


図22

(翻刻)

のちの世をななく涙といひなしてしほりやせ

ましすみそめのそて

大納言成通ふみつかはしけれとつれなかり

ける

女を後よまでうらみ残へきよし申侍ければ

よみ人しらす

たまつさのかよふはかりもなくさめて後よ

までのうらみのこすな

前大納言隆房中将に侍けるとき右近

馬場のひをりの日まかれりけるにもの

み侍ける女車よりつかはしける

ためしあれはなかめはそれとしりなからおほつか

なきは心也けり

返し 前大納言隆房

いはぬより心やゆきてしるへするなかむるかたを

人のとふまで

36 後光厳院 古今集切(1)

『古今集』巻十二(640-644)の断簡である。伝後光厳院筆の『古今集』切は私の分類で十種以上に分けられる。その内で最も残存数が多いのは、『古筆切影印解説I』の183に掲げられた断簡のツレで、徳川黎明会の手鑑『尾陽』『水茎』のほか、伊達博物館蔵手鑑『龍踊台』、長谷寺蔵手鑑等にもツ

レの断簡が収められている。これを(1)とすると、(2)以下のその他の伝後光厳院筆『古今集』切は一、二葉しか存在しない。本断簡はその(1)の断簡である。寸法は二四・五×一六・一cm。(図23)

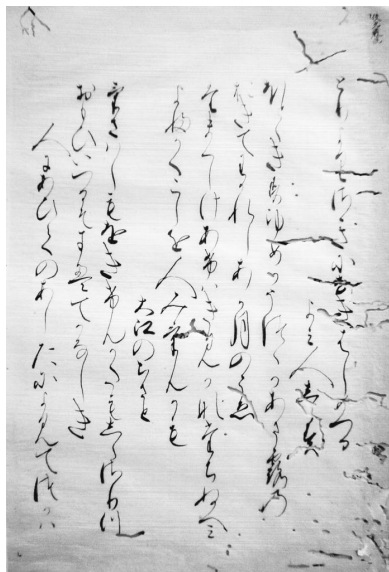


図23

(翻刻)

とりよりさぎになきはしめつる

よみ人しらす

ほと、きすゆめかうつ、かあさ露の

おきてわかれしあか月のこゑ

たまくしけあけはきみなたちぬへみ

よふかくこしを人みけんかも

大江のちさと

けさはしもをきけんかたもしらさりつ

おもひいつるそきえてかなしき

人にあひてのあしたによみてつかは

以上で、天皇、上皇の並びが終る。次には親王が続くのであるが、親王の項では「宗尊親王」がずらりと並んで、それ以外の親王が一枚もないのである。ちよつと不思議な気もするが、おそらく名物切を中心に透写を行った結果なのではないかと想像している。紙数も尽きたので、今回はここまでで止めておこうと思う。

なお、読めなかつた箇所は空欄□とした。

辛うじて試みに読んだ文字は□で囲んで試解とした。すべて解読した上で発表すべきであるが、いつ終るとも知れないので、とりあえず発表を急いだ事情を諒とされたい。

(こじま・たかゆき 成城大学名誉教授)